［研究論文］

「最も長いソネット」を歌う
—「シビュラの葉を読んで」の音楽的効果—

髙　橋　美　帆

1．はじめに

ジェラード・マンリー・ホプキンズ（Gerard Manley Hopkins, 1844-89）のソネット「シビュラの葉を読んで」[1]（‘Spelt from Sibyl’s Leaves’, 1886）は，書簡で述べられているように，当時の彼の作品中「最も長いソネット」（‘the longest sonnet ever made and no doubt the longest making’）（C^2 840）（‘my long sonnet, the longest, I still say, ever made’）（C 841）であった。一行八詩脚の長さであるうえ，行間休止（caesura）の記号（｜）が付されているため，一見すると楽譜を思わせる。

「シビュラの葉を読んで」と音楽，というテーマは長く語られてきた[3]。それはこの記号からの連想のみならず，友人ブリッジズ（Robert Bridges: 1844-1930，1919 桂冠詩人）への手紙で「一行八詩脚で音楽に近い効果を目指した」（‘It is in 8-foot lines and essays effects almost musical.’）（C 840）（1886 年 11 月 26 日），「眼ではなく声を出して，ゆったりと，詩（韻律ではなく）として[4]読むこと」（‘[this long sonnet] should be, made for performance and that its performance is not reading with the eye but loud, leisurely, poetical (not rhetorical) recitation’）（C 842），「このソネットは歌うように，脚の長さはテンポ・ルバート[5]になるよう気をつけること」（‘This sonnet shd. be almost sung; it is most carefully timed in tempo rubato’）（1886 年 12 月 11 日）（C 839-42）などと，ホプキンズ本人が言及しているからである。

音楽（歌唱）を目指したこのソネットは，1884 年から約 2 年間かけて完成したようである。現在手稿は 5 つ残っており，書き始めたのは 1884 年 10 月頃，書き上げたのは 1886 年末頃であると推定されている。初手稿（MS.1:H.i.51r）は冒頭 2 行を書きつけただけのメモである。

Earnest, earthless, equal, attuneable, vaulty, voluminous,. . . stupendous
Evening, dealing the dark down, time’s drone, sullen hulk-of-all,
hearse-of all night,
Evening, dealing the drone-dark down, hollow hulk-of-all, home-of all,
hearse-of-all night,

興味深いのは，冒頭 1 行すべてと 2 行目最初の語 ‘Evening’，そして最後の ‘hearse-of-all night’ が，最終稿（MS.4，MS.5）まで変わらない点である。推敲を重ねるホプキンズの気質から察するに，この冒頭部を生かしたいがために，彼は 2 年間もかけて「最も長いソネット」に仕上げたのではないだろうか。

そこで本稿ではまず，昨年（2013 年）新たに出版されたホプキンズの書簡集を参照して，「シビュラの葉を読んで」の創作契機や意図を探って，彼がこだわったと思われる冒頭部を解釈したい。次に，ホプキンズがこの作品において目指した音楽（歌唱）という点から，「シビュラの葉を読んで」の音楽的要素を取り上げてみたい。ホプキンズは自分なりの韻律論を展開して，詩に添える曲も手がけるほど，「音」を追求した詩人である。本稿では作品の音韻面そのものを中心に分析かつ解釈したうえで，書簡に見られる創作背景なども参照しながら，この長いソネットの目指した「音楽に近い効果」を探ってみたい。最後に，本稿の作品解釈を踏まえて，日本語の定訳とされている『ホプキンズ詩集』（安田・緒方，1982）所収の「シビルの葉を読んで」を参考にしながら，新たな日本語訳を提示したい。

2. 冒頭部「夕暮れ」の解釈

作品の書き始めから完成まで変わらなかったのは，冒頭 1 行すべてと 2 行目最初の語 'Evening'，そして同じく 2 行目最後の 'hearse-of-all night' である。冒頭 1 行には 'Evening' にかかる形容詞が並んでいる。それぞれの意味について，主な注釈を挙げながら検討してみよう。

最も詳細で重要な注釈はマッケンジー編 *OET* [6]（MacKenzie, 1990, 471-6）である。それまでは同じくマッケンジー編の『読者向ガイド』（MacKenzie, 1981, 159-63）が他の注釈書等 [7] でも参照され，解釈の一助となっていた。それらに先駆けて 1975 年，ミルワードは夕暮れの空の様子と空に浮かび上がるシビュラの葉の様子をイメージ写真で示しながら，著書の 1 章を割いて詳しく解釈している（Milward 82-9）。

まず 'Earnest' についてミルワードは 'tense or strained seriousness'（Milward 85），マッケンジーは 'solemn'（MacKenzie, 1981, 160）と解している。日本語定訳ではマッケンジーを参照して「荘厳な」（安田・緒方 200）と訳されている。しかしながら，ミルワードとマッケンジーがともに典拠として挙げているのは 1871 年 4 月 22 日の日誌の一節（J[8] 207）である。日誌の該当箇所が書かれた日は，この詩を書き始めた 1884 年から 13 年もさかのぼり，典拠としては弱いように思われる。また 'Earnest' と頭韻を踏む 'earthless' について，ミルワード，マッケンジーともに 1870 年の日誌（J 200）にさかのぼって，'an implication of remote and aloofness, as of the gods of Epicurus and Lucretius' (Milward 85)，'wholly independent of the earth'（MacKenzie, 1981, 160）と解している。日本語定訳でも，これらの解釈に従って「この世のものならぬ」（安田・緒方 200）と訳されている。しかし，その典拠はまたもや 14 年もさかのぼっており，創作時から離れすぎている感は否めない。

本稿では，こうした初期の日誌ではなく，このソネットを手掛け始めた頃の資料に典拠を求めて，冒頭部を解釈していきたい。1882 年から 86 年にかけての日誌は残されていないため書簡を探索したところ，「シビュラの葉を読んで」冒頭部の着想につながる記載が見つかった。それによると，直接の契機になったのは 1883 年に起こったインドネシア，クラカトア島で起こった火山の爆発であったようである。ホプキンズは『ネイチャー』（*Nature*）誌に 4 度ほど手紙を寄せて，クラカトアの爆発とその後の夕暮れの空の様子について語っている。この手紙の存在は 20 世紀後半まで知られていなかったが，このたびの書簡集には 4 通とも収められている。

インドネシアのクラカトア島の火山が噴火し始めたのは，1883 年 5 月 20 日朝 6 時ごろ，それに伴って地震も起こった。23 日にその報せは「ヴィクトリア朝のインターネット」[9] ともいうべき海底ケーブルですぐに伝えられ，24 日ロンドンの『タイムズ』（*The Times*）紙に短い記事 [10] として登場する。以降クラカトアの噴火は『タイムズ』紙で逐次報告されていった。同年 8 月 27 日，クラカトアの火山は大爆発を起こし，ついに島そのものが姿を消し，「最後の審判の日が来た」と地元の人々はみな信じた [11]。その予兆と思われる異常現象はいくつも報告されており，ホプキンズが 1882 年 11 月に『ネイチャー』誌に寄稿した「奇妙な光環」（'A Curious Halo'）も，そうした現象のひとつであった。

ホプキンズが初めて『ネイチャー』誌に寄せた手紙は同誌 27 号（1882 年 11 月 16 日）掲載，別の読者の手紙への返信として，先に触れたように 'A Curious Halo' と題され，沈む太陽に対して東の夕空に発する光の現象について書かれている。2 番目の手紙は同誌 29 号（1883 年 11 月 15 日）掲載，日付は 11 月 12 日，'Shadow-Beams in the East at Sunset' と題され，前の手紙の続きとして，日没時の東の空に現れる「影線」（shadowbeams）について書かれている。3 番目の手紙は最も長く，同誌 29 号（1884 年 1 月 3 日）掲載，日付は前年 12 月 21 日，'The Remarkable Sunsets' と題されている。同誌の投稿欄では 1883 年 12 月から 1884 年 5 月頃まで，同じ題名で何人もの読者が活発に投稿して議論しており，ホプキンズもその中の一人であった。彼の手紙には，日没時の空

の変化や色合いについての詳細な記録が示されている。その後1884年2月ホプキンズはストーニーハーストからダブリンへ移る。最後の手紙は1884年10月19日ダブリンで書かれ，『ネイチャー』誌30号（1884年10月30日）掲載，別の読者の手紙への返信として‘The Red Light round the Sun — The Sun Blue or Green at Setting’と題されている。1883年11月から1年にわたる観察記録のいわば総括である。太陽を取り巻く赤い光を「光環」（‘halo’）や「光冠」（‘corona’）と呼ぼうと，それは太陽そのものを取り巻くがゆえに「危険なもの」（‘a hazardrous thing’）である，とホプキンズは示唆する（C 686）。そしてクラカトアの爆発以降，日没時に太陽が緑や青に見えることを指摘し，爆発後の浮遊物が地球の周りを覆って土星の輪のようになっている，と締めくくっている（C 687）。

最後の手紙で注目したいのは，夕暮れの様相に変化をもたらしたのがクラカトア島の火山爆発である，とホプキンズが断言している点である。この大噴火は，大地震と大津波を伴って甚大な被害をもたらし，最後の審判の連想に結びつけられた。この大爆発のあと，ホプキンズが『ネイチャー』誌への手紙に書いたように，燃えるように不気味な夕焼けや残照が世界各地で見られるようになる。1884年に書き始められた「シビュラの葉を読んで」の原点は，まさしくこの不吉な夕暮れの空に見いだせるのである。

ホプキンズのいくつかの作品，たとえば『ドイッチュラント号の難破』（*The Wreck of the Deutschland*, 1875-6）等において，夕暮れはすでに重要なモチーフとして登場していた。彼は以前から空の観察に執心しており，夕暮れが主要なテーマとして歌われてもなんら不思議はない。ただし「シビュラの葉を読んで」の夕暮れは，以前ホプキンズが観察していた夕暮れとは異なる。かつての夕暮れは神の恩寵であった。しかし，「シビュラの葉を読んで」のそれは，クラカトア爆発後の不気味な夕焼け，最後の審判の到来を想起させる不吉な夕暮れである。

では，クラカトア爆発後の夕暮れを念頭において，「シビュラの葉を読んで」の冒頭を検討してみよう。ここで歌われているのは，7つの形容詞に1拍の強勢休止（. . . ）[12] までつけられた，尋常ではない「夕暮れ」（‘Evening’［大文字で始まるよう行頭に置かれている点にも注目したい］），そして「すべての棺」（‘hearse-of-all’）である「夜」（‘night’）への移り変わりである。その残照の様相に詩人はシビュラの葉（託宣）を読み取り，かつ自らの終末を読み解いたうえで，それを内的風景として思い描いている。この文脈で‘Earnest’を解釈するなら，託宣にならって古義にさかのぼり‘zeal’や‘vigorous’という意が「燃えるような夕焼け」によりふさわしく，同時に名詞の‘sign’（前兆）の意を重ねるのも可能である。そして‘earthless’には‘unearthly’や‘not of the earth’という意味だけではなく，消滅して塵となったクラカトア島の姿を示す‘without earth or soil’という意味も含まれるかもしれない。続く‘equal’には，誰かれなく無差別に襲ったこの災害についての比喩的な解釈があてはまるだろう。また，火山が消滅して平らになったクラカトアを想像して，古義の‘level’という意味が読み取れ，そこから次の‘attuneable’につながる音楽の‘level’という意も含まれてくるかもしれない。ホプキンズがこの作品で音楽を意識していたことはブリッジズへの手紙（C 839-42）からも知られており，‘attuneable’についての*OET*の詳解でも‘harmonious, tuneful, able to change in pitch (colour), tensing to different tones’（MacKenzie, 1990, 473）と，音楽用語を交えてまとめられている。また「夕暮れ」を修飾する直接の意味としては，ホプキンズが観察していた，数色にわたる層を成す残照の色合いの様相を表したものと解釈できるだろう。

母音の頭韻が連続した後に続く‘vaulty, voluminous’は，唐突に聞こえるかもしれない。しかしながら，火山（volcano）の響きを含んでいると理解すれば，違和感なく聞こえるのではないだろうか。またホプキンズは『ネイチャー』誌宛の3番目の手紙（‘The Remarkable Sunsets’）で，日没時の空の変化についてまとめ，残照の持続時間が長く位置が高くなった，と指摘している。燃えるような残照が空高く位置して，天蓋のように茫漠と広がっている様子が，「シビュラの葉を読んで」の冒頭部の描写を思い起こさせる。また‘voluminous’の古義には「渦巻く」という意味が

ある。ホプキンズの2番目の手紙（‘Shadow-Beams in the East at Sunset’）には「干草畑の刈り跡のように，空には巻雲で縞がついていた」（‘the sky was striped with cirrus cloud like the swaths of a hayfield’）というくだりがあり，この「渦巻く」という古義に通じる印象が感じられる。やがてその夕映えの空の上に，「黒く このうえもなく黒く」（‘black,/ Ever so black’）シビュラの託宣が現れてくる。

また，強勢の置かれる休止（‘…’）と ‘stupendous’ について，ミルワードは ‘the poet stresses his sense of awe and terror at the implication of the scene.’（Milward 86）とし，マッケンジーは ‘The dots which follow mark a pause equal to a foot in length. The Latin root of *stupendous* suggests a reaction of numbness and fear’（MacKenzie, 1981, 160）とし，さらに ‘stupendous’ について ‘in Lat., causing fear and amazement. J.Kuhn [Joaquin Kuhn] compares *Dies Irae*, where death and nature are stupefied by the Day of Judgment (‘Mors stupebit, et natura’).’（MacKenzie, 1990, 474）と解している。ホプキンズの目にした燃える夕焼けはまさしく「息がとまる」ほど「驚くべき」光景だったに違いない。*OET* の注釈が引用している「怒りの日」の一節「死と自然は驚くだろう / 被造物なる人がよみがえる時に / 審判者に答えようとして」（Mors stupebit et natura,/ Cum resurget creatura,/ Judicanti responsura.）は，ヨハネの黙示録20章12節につながり，いよいよ最後の審判が始まる。

以上の解釈をもとに，初手稿から変わらない部分を訳しなおしてみよう――「烈しく 地を砕き 等しく 溶け合い 天を覆い うねり巻く … 驚天動地の／夕暮れが（・・・）万物の棺の 夜にうつりかわる」。

このように，クラカトア火山の爆発から最後の審判を連想したホプキンズは，この災害に顕現した神の怒りを解くために，残照に浮かび上がる託宣を読もうとした。つまり「シビュラのようにホプキンズは預言者であるが，神々の声を読み解くのではなく，夕暮れを読み解いている」（Feeney 129）のである。

3.「最も長いソネット」の音楽的要素

次に，この作品でホプキンズの目指した「音楽（歌唱）」および「音楽的効果」という点から，「シビュラの葉を読んで」の音韻面を分析かつ解釈して，この作品における音楽的要素を考察してみたい。

前項で解釈した1884年秋に書かれたと思われる手稿（MS.1:H.i.51r）とそれ以降に書かれた2つの手稿（MS.2:Dub f.15r, MS.3:Dub.20v）は無題である。「シビュラの葉を読んで」というタイトルが初めて見られるのは，1886年12月11日付ブリッジズ宛の手紙に同封された手稿（MS.4: A. pp.181-2）である。この手稿には ‘sonnet: sprung rhythm: a rest of one stress in the first line’ と記されており，韻律記号や行間休止も付されている（他の手稿には付されていない）。本稿ではこのブリッジズ宛の手稿（MS.4）をテクストとして引用し，韻律を分析していく。行間終止のマーク（|）とストレスマーク（/）はホプキンズ自身が付したものである。

Earnest, earthless, equal, attuneable, | vaulty, volumin**ous**,. . . stupend**ous**⇒ a

Evening strains to be time's vast, | womb-of-all, home-of-all, hearse-of-all night. b

Her fond yellow hornl**ight** wound to the west,

| her wild hollow hoarl**ight** hung to the h**eight**⇒ b

Waste; her earliest stars, earl stars, | stars principal, overbend us, a

Fire-featuring heaven. For earth | her being h**as** unbound; her dapple is at end, **as**- ⇒ a

tray or aswarm, all throughther, in throngs;

| self in self steepèed and pashed —— quite⇒ b

Disremembering, dismembering | all now. Heart, you round me right⇒ b

With: Our evening is over **us**; our night | whelms, whelms, and will end **us**. a

Only the beakleaved boughs dragonish | damask the tool-smooth bleak light; black,⇒ c

Ever so black on it. Our tale, O our oracle! | Let life, waned, ah let life wind⇒ d

Off her once skeined stained veined variety | upon, all on two spools; part, pen, pack⇒ c

Now her all in two flocks, two folds —— black, white;

| right, wrong; reckon but, reck but, mind⇒ d

But these two; ware of a world where but these | two tell, each off the other; of a rack⇒ c

Where, selfwrung, selfstrung, sheathe-and shelterless,

| thoughts against thoughts in groans grind. d

（‘Spelt from Sibyl’s Leaves’:1-14）（強調は筆者による）
註：⇒は行跨り，□は頭韻[13]（語および音節単位），太字は中間韻，
下線は同語句反復や類語反復などの反復を示す

全体を通して注目したいのは頭韻である。まずオクターヴ（前半８行）を見てみよう。ほぼすべての行をつなげる行跨りにともない，頭韻が途切れなくつながっていく。とくに冒頭の ‘Earnest’ に始まる一連の母音の頭韻は，作品中もっとも印象的な響きを生み出している。この［ə:］の響きは４行目の ‘earliest’ と ‘earlstars’，さらに５行目の ‘earth’ にまでつながっていく。そして，その母音の響きに加え，［v］の頭韻（１行目 ‘vaulty’ と ‘voluminous’，２行目 ‘vast’）と［st］の頭韻（１行目 ‘stupendous’，２行目 ‘strains’）が，行跨りによって形成されている。行跨りによって結ばれた［st］の頭韻（１行目 ‘stupendous’，２行目 ‘strains’）は，４行目の ‘stars’ で３回繰り返される。夕暮れ時にかすかに瞬いていた星々は，徐々に天空に姿をあらわしていく。その様子が，音によっても表現されている。

そして，２行目の ‘womb’ に始まり４行目の ‘Waste’ にまでつながる一連の［w］の頭韻を含む語群（‘womb’ ‘wound’ ‘west’ ‘womb’ ‘wild’ ‘Waste’）は，周囲の語と母音韻（アソナンス）を響かせながら，夕空の残照が消えていく様子を表している。３行目に見られる均整の取れた同等句反復のあと，４行目の冒頭であり文の最後を締める ‘Waste’ には，意味と音が集約されている。

これまで ‘Waste’ は ‘hung’ にかかる形容詞あるいは主格補語と解釈され（緒方 151），３行目からは４行目にかけては「そのやさしい夕暮の光の束は　すでに西に傾むき　非情なる　うつろな薄暗がりとなって　荒涼たる中天にかかっている」（安田・緒方 201）と訳され，それが日本語定訳とされてきた。しかしながら，一連の音の効果と意味のつながりから考えると，‘Waste’ はもう少

し重要な内容語なのではないだろうか。「シビュラの葉を読んで」の着想が現れていると思われる作品「時は夕暮れ」（‘The times are nightfall’，原文は無題）の冒頭を見てみよう。

The times are nightfall, look, their light glows less;
The times are winter, watch, a world undone:
They waste, they wither worse; they as they run
Or bring more or more blazon man’s distress. (1-4)

（‘The times are nightfall’ :1-4）（強調は筆者による）
□：［w］の頭韻

時は夕暮れ　ほら　光は薄れていく
時は冬　ごらん　世界は崩れていく
時は消え入り　さらに弱まる　　時は進むにつれて
いっそう　人間の苦しみをもたらして見せつける

描写されている情景と，一連の［w］の頭韻には，「シビュラの葉を読んで」の萌芽が見られる。ここで ‘Waste’ は動詞として使われている。これを「シビュラの葉を読んで」にも適用すると，3行目の同等句反復は全体で主部（‘wound’ と ‘hung’ は直前の名詞にかかる過去分詞）となり，‘Waste’ は動詞ととらえられる。すると，先ほどの部分は「夕暮れの優しい黄色の　角のように広がる光は　西へとうねり　夕暮れの激しくもうつろな　ほの白い光は　高天にかかり／　消え入る」（‘Her fond yellow hornlight wound to the west, | her wild hollow hoarlight hung to the height/ Waste.’）と訳せるだろう。

そして，［w］の頭韻に加え，一連の［h］の頭韻も，「シビュラの葉を読んで」において特徴的である。2行目の ‘of-all’ の反復では，直前の語（‘womb’，‘home’，‘hearse’）の移り変わりが，被造物をすべて包み込む茫漠な空の移り変わりに重ねられている。その ‘home’ と ‘hearse’ から始まる［h］の頭韻は5行目の ‘heaven’ 以降に続いて，天空の広がりをゆったりと表している。また，ホプキンズの造語である ‘hornlight’ は ‘hoarlight’ と響き合い，同等句反復の響き合いが天空に瞬く光のハーモニーとして美しく奏でられる。5行目の ‘For earth | her being has unbound; her dapple is at end,’ については，定訳では ‘For’ を接続詞にとり ‘earth’ を主語，‘her being’ を目的語，‘has unbound’ を動詞ととり「大地はすでにその存在をこぼち　その斑なる姿は　消え果て　散らばり」（安田・緒方 201）と訳されている。この場合 ‘her’ は「大地（‘earth’）の」の意となる。一方，「天」（‘heaven’）の対照として「地」をとらえると，‘For earth’ がまとまりとなる。そして頭韻［h］が ‘heaven’，‘her’，‘has’，‘her’ の語を，音の上でも意味の上で結び付けているとするなら，‘her being’ を主語，‘has unbound’ を動詞ととり，「地からみると　天空の存在はほどけてしまい　空の斑も消えてしまう」という意味になる。この場合，詩人の見つめる対象は地ではなく，あくまでも天空の様子である。そして，7行目の呼びかけ「心よ」（‘Heart’）で，［h］の音がはっきりと響きわたり，詩人は自分の心の中に映し出される情景に目を向けていく。こうした［h］の頭韻の例のように，このソネットでは通常の頭韻だけではなく同語反復や類音反復による頭韻によって，詩全体のハーモニーが高められている。

さて，セステット（後半6行）では，オクターヴで響いていた［h］の音は ‘Heart’ を最後になくなり，母音や流音（［r］［l］）は響いているものの，7行目の二重語 ‘Disremembering, dismembering’（「忘れられ　ばらばらになる」）で響いていた破裂音［d］の頭韻が，9行目からは［b］の破裂音と交差頭韻を成しながら，託宣である「シビュラの葉」の不吉な影を音としても映し出していく。

Only the beakleaved boughs dragonish | damask the tool-smooth bleak light; black,⇒
Ever so black on it. Our tale, O our oracle!

（‘Spelt from Sibyl’s Leaves’: 9-10）（強調は筆者による）
註：⇒は行跨り，□は頭韻（語および音節単位），
下線は同語句反復や類語反復などの反復を示す

くちばし状の葉をつけた大枝だけが　竜紋状になり　ダマスク紋の文様をつける
なめらかな刃のように荒涼とした光に。　黒く
これまでになく黒く　その光の上に。　わたしたちの物語　ああ　わたしたちの託宣！

破裂音の頭韻はさらに続いていく。一連の流音のあと，11 行目では摩擦音［s］［v］の頭韻（‘skeined stained veined variety’）（「もつれあって色づけされ　筋のついた多様なものたち」）が続き，‘upon’ と ‘spools’ の強音節で響く破裂音［p］と，［p］の頭韻（‘part, pen, pack’）（「分けて　閉じ込めて　詰め込め」）がひっきりなしに続く。そして 破裂音［t］の音や頭韻――とくに（最後の審判で）「二つの世界に分けられる」という主題を強調するために繰り返される ‘two’ の反復――は，各行に施されている［b］の頭韻の合間を縫って，同様に散りばめられている。最後はアクセント記号を施された破裂音［g］（‘against’）および同音の頭韻（‘groans grind’）により，セステットにおける破裂音のパレードは終わる。

最終 2 行では［w］の頭韻が ‘ware’ ‘world’ ‘where’ にあらわれる。この頭韻はオクターヴ 2 行目から 4 行目にかけて残照の様子を表現していた音である。ここでは，最後の審判を迎える世界を表している。そして明らかになるのは，残照の様子が暗示していたのはこの世の終焉であったことである。その暗示は，ソネットの最初と最後で響き合う頭韻［w］によっても示されている。

（・・・・）ware of a world where but these | two tell, each off the other; of a rack⇒
Where, selfwrung, selfstrung, sheathe-and shelterless,
| thoughts against thoughts in groans grind.

（‘Spelt from Sibyl’s Leaves’: 13-14）（強調は筆者による）
註：⇒は行跨り，□は頭韻（語および音節単位），
下線は同語句反復や類語反復などの反復を示す

（・・・・）これら二つだけが互いに物語る世界を　拷問台を　気にかけよ
そこで個は捩じられ　個は縛られ　鞘も蔽いもなく 思いと思いが呻き　軋りあう

ホプキンズの「個」（‘self’）は神に救いを求めながらも，「拷問台」（‘rack’）に置かれる。押韻を伴う多音節語や複合語による類語の連続，そして同語反復によって，摩擦音［s］［ʃ］［θ］が重くゆっくりと響く。同時に破裂音［g］が徐々に音量を上げていく――終末の不吉な音を立てながら，この長いソネットは終わる。

次に脚韻を見てみよう。脚韻は abbaabba cdcdcd でイタリア式ソネットである。オクターヴで脚韻（a）を踏んでいる 1 行目の ‘stupendous’，4 行目の ‘overbend us’，5 行目の ‘end, as-’, 8 行目の ‘end us’ を比べると，脚韻の音節が徐々に分解されていくことがわかる。つまり，3 音節語 ‘stupendous’ の後半 2 音節で踏んでいた脚韻が，2 音節語の後半＋単音節語（‘overbend us’）になり，次に単音節語＋ 2 音節語の前半（‘end, as-’）になり，ついに 2 つの単音節語（‘end us’）に分

解されていく。この脚韻の分解は，ばらばらになっていく「個」の姿や世界の様子を表現している。ちなみに単語を音節で分けて韻を踏む ‘end, as-’(tray）は，ホプキンズ独特の押韻であり，「隼」（‘The Windhovoer’, 1877）の冒頭 2 行にかけての ‘king- / dom’ の例がよく知られている。

オクターヴのもうひと組の脚韻（b）も見てみよう。2 行目の ‘night’，3 行目の ‘height’，6 行目の ‘quite’，7 行目の ‘right’ である。この詩の主要テーマである ‘night’（「夜」）には頭韻を踏む語がなく，かつ行末終止で，意味としても音としても独立している。一方 ‘height’（「高天」）は［h］の頭韻に含まれ，かつ ‘light’ とも中間韻を成し，天空の様子を歌う一連の描写のなかに織り込まれている。また ‘night’ 同様に頭韻を施されていない ‘quite’（「すっかり」）は，行跨りで二重語 ‘Disremembering, dismembering’ にかかり，それらを強調している。副詞 ‘right’（「然るべく」）は ‘round’（「ささやく」）と頭韻を踏みながら，次行の ‘(our）night’ と行跨りによる中間韻でつながって，夜の到来とこの世の終焉を告げている。

Heart, you round me right⇒
With: Our evening is over us; our night | whelms, whelms, and will end us.

（‘Spelt from Sibyl’s Leaves’: 7-8）（強調は筆者による）
註：⇒は行跨り，□は頭韻（語および音節単位），
下線は同語句反復や類語反復などの反復を示す

心よ　お前は然るべくわたしにこうささやく
「夕暮れはわたしたちに覆いかぶさる　夜はだんだん押し迫り　わたしたちを潰してしまう」

このように，オクターヴの始まりから終わりにかけて，この世界が終焉に向かっていく様子が脚韻の音の変化や語のつながりにも表現されている。「シビュラの葉を読んで」で表現されている「音楽」には，夜明けである最後の審判を待つまでの厳しい切迫感や暗い不安感が示されている。

では，セステットの脚韻（c）を見てみよう。セステットではすべての行が行跨りで前後の行につながっているため，‘black’ は一連の頭韻のみならず次行の ‘black’ と響き合い，13 行目までその破裂音を頭韻として響かせる。次の ‘pack’ は先に指摘したように，破裂音［p］の連続（‘upon’ ‘spools’ ‘part, pen, pack’）の一部である。このあたりから 13 行目までは単音節語が並び，「分けて，閉じ込めて，詰め込まれ」「黒と白，正と邪に」この世の創造物が分けられていく様子が，短くばらばらに分かれていく音節にも表されている。そして ‘rack’（「拷問台」）は，意味においても音においても，重要なモチーフである。前行の ‘right’ ‘wrong’ ‘reck’ ‘reckon’ と響き合い，また次行の二重語 ‘selfwrung, selfstrung’ の韻と，破裂音で最後を締める ‘groans grind’ の強勢とも，［r］の響きで結ばれている。

そして脚韻（d）では，‘wind’ は同等句反復 ‘waned’ と頭韻を響かせ，行跨りで次行の ‘Off’ とつながり ‘wind off’（「ほどく」）という意味になり，次行の糸巻の比喩を導く語となっている。12 行目の ‘mind’（「心に留めよ」）には頭韻を踏む語がないため，オクターヴの ‘night’ の例のように独立しており，さらに動詞と目的語で成す強度の行跨りによって強調され，音においても意味においても際立っている。最後の ‘grind’ は ‘against’ と ‘groans’ と響き合って印象深い韻を成し，先にも述べたように，このソネットの最後にふさわしく，最後の審判を前にした世界に満ちる切迫感や不安感が，不吉な予兆を感じさせる破裂音の響きで表現されている。

このように「シビュラの葉を読んで」における音楽的要素は，最後の審判前の世界の終焉と混乱を表現している。作品全体に特徴的なのは，語源の似た語を並べて同じ音を反復させ，音と意味を響き合わせている点である。こうして多種多様な音の反復とその交錯を重ねつつ，ホプキン

ズは「音楽に近い効果」を，つまり声に出して読むソネットの音楽性を高めようとしているのである。

4. 結び――「シビュラの葉を読んで」試訳

最後に，本稿で論じてきた「シビュラの葉を読んで」の音楽的要素と創作の背景を踏まえ，日本語の定訳とされている「シビルの葉を読んで」（『ホプキンズ詩集』所収）も参考にしながら，試訳を挙げておく。この拙訳を作品解釈の一助として提示し，本稿の結びとしたい。

シビュラの葉を読んで

烈しく 地を砕き 等しく 溶け合い　天を覆い うねり巻く … 驚天動地の
夕暮れが張りつめ　時の広漠たる　万物の胎　万物の宿　万物の棺である夜になる。
夕暮れの優しい黄色の角のように広がる光は　西へとうねり
　　夕暮れの激しくもうつろなほの白い光は　高天にかかり
消え入る。　夕暮れの一番星　一等星　恒星が　わたしたちのうえに覆いかぶさり
天を火炎のように燃えたたせる。　地からみると　天空の存在はほどけてしまい
　　夕空の斑も消えてしまい
うろうろしたり　うようよしたり　すべては入り乱れて　群れになる。
　　個は個に没して砕かれ――まったく
すべては忘れられ　ばらばらにされてしまう。　心よ　お前は然るべくわたしにこうささやく
「夕暮れはわたしたちに覆いかぶさる　夜はだんだん押し迫り　わたしたちを潰してしまう」
くちばし状の葉をつけた大枝だけが　竜紋状になり　ダマスク紋の文様をつける
　　なめらかな刃のように冷え冷えとした光に。　黒く
これまでになく黒く　その光の上に。　わたしたちの物語　ああ　わたしたちの託宣！
　　生命をして弱まらせ　生命をしてほどかせよ
かつてはもつれ　斑になり　筋のついた　多様なものたちを
　　すべて二つの糸巻に巻きなおせ。　　分けて　閉じ込めて　詰め込むのだ
さあ　そのすべてを　二つの群れに　二つの囲いに――黒と白　正と邪に分けて
　　数え上げて　気にかけて　心に留めよ
この二つだけを。　これら二つだけが互いに物語る世界を　拷問台を　気にかけよ
　　そこで個は捩じられ　個は縛られ　鞘も蔽いもなく 思いと思いが呻き　軋りあう。

本稿は，日本ホプキンズ協会関西部会月例会第 393 回（2013 年 9 月 29 日），同 394 回（10 月 27 日），同 395 回（11 月 24 日）における ‘Spelt from Sibyl’s Leaves’ についての発表に，月例会参加者の意見を一部参考にしながら，加筆・修正を施したものである。

註

1 この作品の邦題は「シビルの葉を読んで」（安田・緒方訳）で，すでに定着している。本稿では，日本聖書研究所訳の巫女シビュラにかんする記載に従って「シビュラの葉を読んで」と訳した。

2 C: *The Collected Works of Gerard Manley Hopkins. Volume II. Correspondence 1882-1889* (R. K. R. Thornton and Catherine Phillips eds., Oxford UP, 2013), 以下同。

3 古くは John F. Waterhouse ‘Gerard Manley Hopkins and Music’ (*Music and Letters* 18, no.3, 1937: 227-35) から Jahan Ramazani *Poetry*

and Its Others (The University of Chicago Press, 2014) まで。

4 'poetical (not rhetorical)'：この点については矛盾がある。スプラング・リズムについてホプキンズは 'the nearest to the rhythm of prose, that is the native and natural rhythm of speech, the least forced, the most rhetorical and emphatic of all possible rhythms'（強調は筆者）と言っている（Winsatt 10）。

5 楽曲の基本テンポは崩さずに個々の音符の長さを変化させて演奏すること。

6 *OET : The Poetical Works of Gerard Manley Hopkins* (Norman H. MacKenzie ed., Clarendon, 1990), 以下同。

7 学生向けに普及した York Notes (Noted by Catherine MacKenzie [Phillips], Longman; York Press, 1983）や Oxford Student Texts (Peter Feeney ed., Oxford UP, 1994) など。

8 J: *The Journals and Papers of Gerard Manley Hopkins* (Oxford UP, 1959)，以下同。

9 詳細は Tom Standage, *The Victorian Internet: The Remarkable Story of the Telegraph and the Nineteenth Century's Online Pioneers* (Weidenfeld & Nicolson, 1998) 参照。

10 記事は '**Volcanic Eruption.** Lloyd's Agent in Batavia under date of May 23rd, telegraphs: 'Strong Volcanic Eruption, Krakatowa Island, Sunda Straits.' 翌 25 日に島の名称は 'Krakatoa' という綴りに落ち着いた（Winchester 180, 185）。

11 当時の様子については Winchester 210-321 に詳しい。

12 この休止 ('. . .') が見られる例は 'The Handsome Heart'(l.13)，'The Leaden Echo and the Golden Echo' (l. 2)，'The Wreck of the Deutschland'(st.28 ll.1,2,4) である。

13 頭韻は慣例的にイタリックで示されることが多いが，本稿では詩の分析に慣れていない読者を想定して，このかたちで強調した。

引用参考文献

Feeney, Joseph J, SJ. *The Playfulness of Gerard Manley Hopkins.* Ashgate, 2008.

House, Humphry, ed. *The Journals and Papers of Gerard Manley Hopkins.* Completed by Graham Storey, Oxford UP, 1959.

MacKenzie, Norman H. *A Reader's Guide to Gerard Manley Hopkins.* Thames and Hudson, 1981.

――, ed. *The Poetical Works of Gerard Manley Hopkins.* Clarendon, 1990.

――, ed. *The Later Poetic Manuscripts of Gerard Manley Hopkins in Facsimile.* Garland, 1991.

Milward, Peter, SJ. *Landscape and Inscape.* Paul Elek, 1975.

Thornton, R. K. R., and Catherine Phillips, eds. *The Collected Works of Gerard Manley Hopkins. Volume II. Correspondence 1882-1889.* Oxford UP, 2013.

Wimsatt, James I. *Hopkins's Poetics of Speech Sound: Sprung Rhythm, Lettering, Inscape.* University of Toronto Press, 2006.

Winchester, Simon. *Krakatoa: the Day the World Exploded 27 August 1883.* Penguin, 2004.（邦訳：サイモン・ウィンチェスター 『クラカトアの大噴火―世界の歴史を動かした火山』柴田裕之訳，早川書房，2004）

石　弘之 『歴史を変えた火山噴火―自然災害の環境史―』 刀水書房，2012.

緒方登摩 『ホプキンズのソネット』 研究社，1993.

日本聖書学研究所編 『聖書外典偽典第三巻 旧約外典Ⅰ』 教文館，1975.

日本聖書学研究所編 『聖書外典偽典第六巻 新約外典Ⅰ』 教文館，1976.

安田章一郎 『G. M. ホプキンズ研究』 清水弘文堂，1968.

――.『ホプキンズ研究　別冊――訳詩の注解』1968.

安田章一郎，緒方登摩 『ホプキンズ詩集』 春秋社，1982.